

# 学習対象との出会いの工夫を通して、

## 旭川市と川との関わりを主体的に追究する意欲を高める学習

～4年『川のまち旭川』調査隊』の実践を通して～

小原 広士

### I はじめに

これからの予測困難な時代の中で、子供たちが未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むためには、探究的な学習は欠かすことができない。

本校では、2年間の研究を通して、児童に身に付けさせる資質・能力を明確にしたり、思考力を高める学習活動の工夫を行ったりしてきた。今後は、これからの社会の変化の中で求められる力を確実に育成する視点を持ち、これまで以上に児童が探究的な学習に主体的に取り組む力を身に付ける必要があると考えた。

そこで、全体研究の3年次テーマ「子供が学びをつなぐ学習づくり」を受け、総合的な学習の時間では、研究テーマを「よりよく生きようとする力を高める学習づくり」と設定した。



川体験ツアーの感想を述べる児童の姿

### II 研究の目的と方法

本研究の目的は、児童の「よりよく生きようとする力」を育むための効果的な手立てについて明らかにすることである。そのために、以下の2つの視点から、授業実践『川のまち旭川』調査隊』における児童の様子について分析する。

- ① 発見課題の設定までの過程「1次：発見課程」
- ② 概念の形成を自覚する自己評価

なお、研究の対象とした単元の概要は以下のとおりである。

#### 1 単元名 『川のまち旭川』調査隊(75時間)

#### 2 単元の目標

- 旭川市の川との関わりについて調べたり、調査したことを基に川を生かしたまちづくりについての考え発信したりすることを通して、川の役割や川を生かしたまちづくりについて理解することができる。(知識及び技能)
- 様々な体験活動を通し、感じたこと・考えたことから課題を作り、情報を集め、整理分析し、自分なりの方法でまとめ・表現することができる。(思考力・判断力・表現力等)
- 友達と一緒に活動するよさを大切にしながら、力を合わせて活動したり、学習を通してできるようになったことや分かったこと、新たな解決の仕方やものの見方・考え方が身に付いたことに気付いたりする。(学びに向かう力、人間性等)

#### 3 単元の概要

##### 【1次：発見過程】

- 川体験ツアーでの体験したことを基に、単元のゴールを設定する。1次の発見課題を「なぜ川のまちと呼ばれているのだろうか。」とし、街頭インタビューや、ゲストティーチャー(以下、GT)から情報を収集し、「川のまち」と呼ばれている理由を明らかにする。

##### 【2次：追究過程】

- 旭川市と川との関わりを調査するために、2次の追究課題①を「川のすばらしさや豊かさの中で、自分が知りたいことを選び、探ろう」とし、個の課題を設定して情報を収集する。調べた情報を川マップにまとめた後は、追究課題②『川を生かしたまちづくり』プランを考えようを設定し、川マップを活用した「まちづくりプラン」を考える。

##### 【3次：表現過程】

- 表現課題を「調査した『旭川市の川とのかかわり』や自分たちが考えた『川を生かしたまちづくり』の取組を発信しよう」と設定し、これまでの学習で学んだり、企画したりしたことを、旭川市民に発信する。

# 1 発見課題の設定までの過程「1次：発見課程」

## (1) 結果

「よりよく生きようとする力」を高めるためには、児童が探究的な学習に主体的に取り組む必要がある。そのために、本実践で重視したのは「発見課題の設定までの過程」（資料1）の「B：学習活動の設定と実施」に位置付けた以下の3つの手立てである。

- ①共通体験による課題意識の醸成
- ②対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせる工夫
- ③児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせる工夫

### ①共通体験による課題意識の醸成

「A：事前調査による児童の実態把握」として取り組んだ事前調査アンケートで明らかになった児童の実態は、以下のとおりである。

- 「川のまち旭川」と呼ばれることを知っていたか。
  - ・は い…5名(14%) いいえ…31名(86%)
- 普段の生活で川に行くことがあるか。
  - ・あ る…7名(19%) な い…29名(81%)

この結果から、児童の旭川市の川に対する既有知識や川での体験が少ないことが明らかになった。既有知識や体験が乏しいと、「C：単元のゴールの設定」や「E：発見課題の設定」場面において、児童の課題意識が醸成されにくく、その結果、探究的な学習に主体的に取り組めない児童が増えると判断した。そこで、以下の川体験ツアー（共通体験）を設定した。

- 1回目：防災施設見学（時数：6時間）
  - ・忠別ダムや永山新川管理センターを見学し、旭川市の川の歴史や文化、防災、治水、利水の取組を学ぶ。
- 2回目：水生生物調査（時数：6時間）
  - ・旭橋下の石狩川や、カムイの杜近くの伊野川で水生生物調査を行ったり、旭橋周辺を散策したりすることを通して、旭川市の川の歴史や、推測する生物、環境について学ぶ。

1回目の防災施設見学（写真1・2）では、それぞれの施設の職員の説明に真剣に耳を傾け、疑問に思ったことを積極的に質問する児童の姿が見られた。

また見学中、児童は「見学前はダムなんて必要無い。ダムを建設することはお金の無駄遣いだと思っていたけれど、私たちが安心して生活できるのはダムのおかげだと思った。このことを他の人にも伝えたい。」<sup>①</sup>「旭川市民を洪水から守るために、永山新川が建設されたこと、そ



写真1 忠別ダムを見学する児童



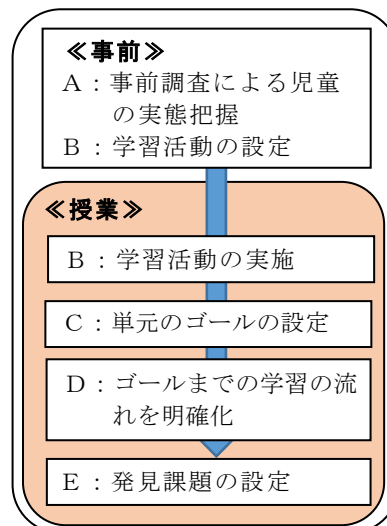
写真2 永山新川管理センターを見学する児童



写真3 旭橋周辺を散策する児童



写真4 伊野川で水生生物調査をする児童



資料1 「発見課題の設定までの過程」

のために、永山に住んでいる人たちの田んぼを川にしたことを知り、とてもありがたいと感じた。また、その当時の人たちへの感謝の気持ちを忘れてはならないと思った。もっと永山新川について勉強し、学んだことを観光客に伝えたい。」<sup>②</sup>等の感想を述べていた。

2回目の水生生物調査(写真3・4)では、旭橋周辺の散策で、旭橋の歴史を真剣に学んだり、石狩川や伊野川にどのような生き物が生息しているのかを楽しみながら調査したりする児童の姿が見られた。また見学中、児童は「沓座石の説明を聞いて、旭橋にはたくさんの人たちの思いが込められていることを感じた。また、戦車が通るために旭橋が作られたことを知って驚いた。旭橋で市民にインタビューをすると、川について何も知らなかったの、これから旭川の川の歴史について学び、発信していきたいと思った。」<sup>③</sup>「きれいな水に生息する魚をたくさん捕まえることができた。また、鮭がこの川に戻ってきていることも教えてもらい、旭川市の川はきれいな川と言えることが分かった。実際に鮭が石狩川に戻ってくるところを見てみたい。また、このことを知っている人はあまりいないと思うので、家族や他の人にも伝えたい。」<sup>④</sup>等の感想を述べていた。

「1次：発見過程」終了時に取り組んだ振り返りの記述には、「ツアーで学んだ情報があったことによって、単元のゴールが決められた。」<sup>⑤</sup>(資料2)、「インターネットで情報を収集するより、体験した方が単元のゴールを決めやすかった。」<sup>⑥</sup>(資料3)という記述が多くみられた。

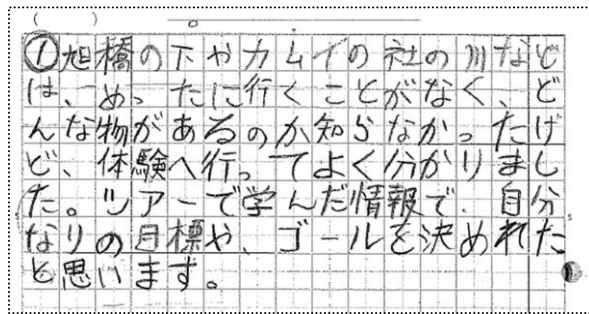
「1次：発見過程」終了時に実施したアンケートでは、児童は次のように自己評価している(資料4)。

アンケート項目		そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
1	あなたは、川体験ツアーに2回行ったことによって、川に対する「疑問」や「関心」、さらには「川へのあこがれの気持ち」が高まりましたか。	28名 (78%)	7名 (19%)	1名 (3%)	0名 (0%)
2	2回の川体験ツアーで知識を得たことによって、旭川市と川との関わりに対して「そうだったんだ!」「すごいな!」「もっと知りたいな!」という気持ちになりましたか。	30名 (83%)	6名 (17%)	0名 (0%)	0名 (0%)
3	2回の川体験ツアーで知識を得たことによって、「単元のゴールを設定し、これからのチャレンジの学習を頑張りたい!」という思い(意欲)が高まりましたか。	30名 (83%)	5名 (14%)	1名 (3%)	0名 (0%)

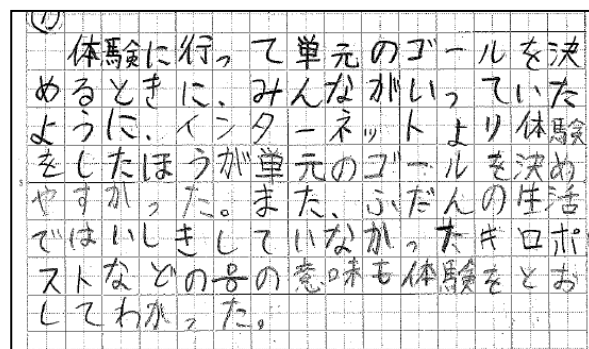
資料4 共通体験による課題意識の醸成についての事後調査結果

## ②対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせる工夫

本実践では、児童に川に対する「あこがれ」や「可能性」を感じさせるために、川体験ツアーで感じたことや考えたことを共有し合う場面を設定した。その際、Xチャートを使って、児童の気づきを板書に整理し(写真5)、その後、これまでの児童の発言や板書から気付いたことや感じたことを発表させた。すると児童から「キーワードは『もったいない』だと思った。忠別ダム、永山新川管理センター、旭橋、カムイの杜には、貴重な情報がたくさんあるのに、そのことを旭川市民は知らないと思うので、『もったいない』と感じた。



資料2 児童Aが記述した振り返り



資料3 児童Iが記述した振り返り

今後は、これらの情報を伝えたらよいと思う。」<sup>⑦</sup>という発言があり、その意見に多くの児童が賛同した。

授業後の振り返りの記述には、「行った場所はみんな同じだけれど、得た知識や感じたことは違うので、今回Xチャートを使って、

情報を交流したことによって、自分が知らない知識をたくさん得ることができたのでよかった。」<sup>⑧</sup>(資料5)という記述が多くみられた。

「1次：発見過程」終了時に実施したアンケートでは、児童は次のように自己評価している(資料6)。

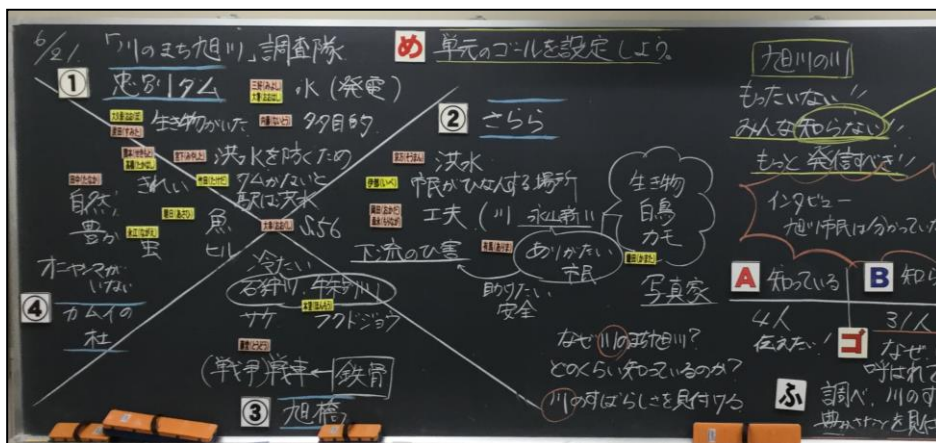
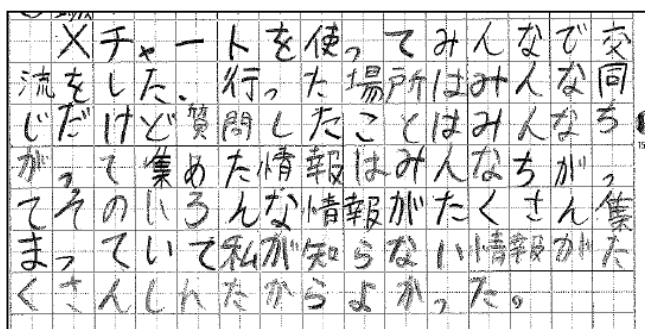


写真5 1次「単元のゴール設定」場面の板書①



資料5 児童ウが記述した振り返り

アンケート項目	そう思う	どちらかといえば		そう思わない
		そう思う	そう思わない	
4 2回の川体験ツアーで得た知識を、研究大会で友達と交流し合ったことよって、旭川市と川との関わりに対する「そうだったんだ!」「すごいな!」「もっと知りたいな!」という気持ちが更に高まりましたか。	28名 (78%)	7名 (19%)	0名 (0%)	1名 (3%)

資料6 対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせる工夫についての事後調査結果

### ③児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせる工夫

本実践では、児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせるために、保護者を対象に行ったアンケート結果を活用した。

②で述べた通り、自分たちの気づきが整理された板書(写真5)を見て、児童は「旭川市民は自分たちが調べた川の情報を知らない人が多いと思うのもったいない。」という感想を抱いた。

そこで、「旭川市民は、本当に黒板に書かれた情報を知らないのかな。」と尋ねると、4人(11%)が「知っている」、31人(89%)が「知らない」と予想した(写真6)。

そこで、本実践の前に、本校の保護者にアンケートを配付し、「\_\_\_\_\_のまち旭川」の空欄スペースに思い当たる言葉を書いてもらったことを児童に伝え、「みんなの予想通り、川の情報を知らない人が多いのであれば、このランキング結果の1位は『川』ではないのでは。」と尋ねた。すると、児童から「川は絶対1位ではない。」「1位は家具。」「ラーメンだと思う。」「雪じゃないか。」「寒さだ。」「自然だ。」などの意見が出た(写真7)。

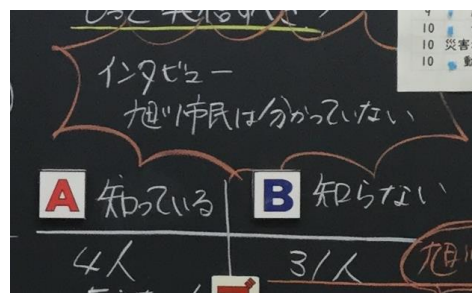


写真6 児童の予想

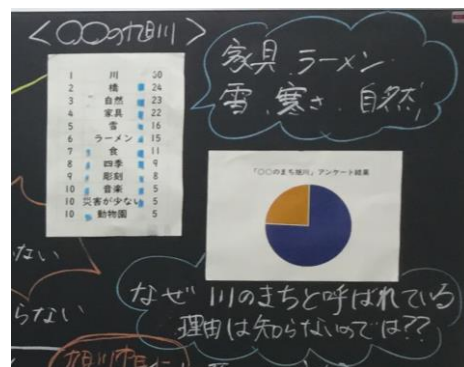


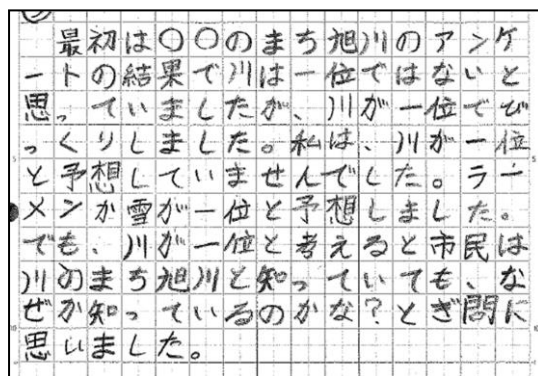
写真7 アンケートの予想と結果

ランキングの発表で、児童が予想した家具、ラーメン、雪、寒さ、自然は1位ではなく、2位に36票の差を付けて川が1位であることを発表すると、児童は驚いた表情を浮かべ（写真8）あちらこちらから、「なぜ『川』が1位なの？」という声が挙がった。



写真8 予想外の結果に驚く児童

この結果に対して児童から「3年生の総合の授業で、旭川市民に旭川のよさをインタビューしたときに、川と答えた人は2人しかいなかった。だから、附属旭川小学校の60人の保護者が川と答えたとしても、この結果には納得できない。」<sup>⑨</sup>「川のまち旭川と呼ばれていることを知っているだけで、その理由を尋ねると、ほとんどの人が『川が多いから』と答えると思う。」<sup>⑩</sup>「自分たちで街頭インタビューを行い、『川のまち』と答える人が本当に多いのか、また、『川のまち』と答えた人の理由は『川が多いから』以外もあるのかを調査したい。」<sup>⑪</sup>という発言が出た。



資料7 児童工が記述した振り返り

本時の振り返りの記述には、「川が1位ではないことに驚いた。旭川市民は、川のまちと知っていても、その理由を知っているのかが疑問に思った。」<sup>⑫</sup>（資料7）という記述が多くみられた。

「1次：発見過程」終了時に実施したアンケートでは、児童は次のように自己評価している（資料8）。

アンケート項目		そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
5	「〇〇のまち旭川」アンケートの順位を予想する場面で、自分たちの予想とは違った結果を知ったとき、「なぜだろう?」「自分たちで理由を調べたい!」という気持ちになりましたか。	31名 (86%)	4名 (11%)	1名 (3%)	0名 (0%)

資料8 児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせる工夫についての事後調査結果

## (2) 考察

### ① 共通体験による課題意識の醸成

下線部①, ②, ③, ④の川体験ツアーでの発言から、川体験ツアーによって、児童が新たな知識を得たことや、川について「もっと知りたい」「学んだことを発信したい」という課題意識を高めていることが分かる。

また、振り返りに、下線部⑤や⑥の記述が多く見られたことから、川体験ツアーで知識を得たことによって、探究意欲が喚起され、その意欲が、単元のゴールを設定する際に効果的に作用したと推察される。

単元後に実施したアンケートの項目1・2・3の結果からも、学習対象に対する「疑問や関心」「あこがれ」、更には「知りたい」「頑張りたい」という学習への意欲が高まったことが分かる。

このことから、「B：学習活動の設定と実施」の場面で、課題意識を醸成するために、体験活動を位置付けたことは、児童が探究的な学習に主体的に取り組む上で有効な手立てになったと考える。

今回実施した川体験ツアーは、今年度初めて行ったものである。来年度以降も、本単元を実施する本校の4年生が、この川体験ツアーに参加するためには、必要な人的又は物的な体制を教育課程に具体的に明記していくことが重要である。

また、本実践から、「C：単元のゴールの設定」や「E：発見課題の設定」場面の前に、共通体験を設定することが、課題意識を醸成させるための手立てとして有効であること

が明らかになった。今後は、教育課程に位置付いている全ての単元の「1次：発見過程」に共通体験が位置付いているかどうかを見直すとともに、設定されている体験活動が、課題意識を醸成する内容になっているかどうかを吟味する必要がある。

## ②対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせる工夫

児童に川に対する「あこがれ」や「可能性」を感じさせるために、川体験ツアーで感じたことや考えたことを共有し合う場面を設定した。なぜなら、児童は話し合い活動を通してより多くの情報に触れ、その結果、川に対する考えが深まり、川への「あこがれ」や「可能性」を実感することができると思ったからである。

下線部⑦の発言「もったいない」は、たくさんの情報に触れ、旭川市の川に対する「あこがれ」や「可能性」を実感したからこそ生まれた気付きだと推察する。

また、児童ウの下線⑧の振り返りの記述や、単元後に実施したアンケートの項目4の結果からも、本実践において、川体験ツアーで学んだことを交流する場面を設定したことによって、児童の新たな気付きが生まれ、その結果、川への「あこがれ」や「可能性」を感じることができたと考える。

「対象へのあこがれ」や「すごい」「もっと知りたい」という思いは、探究的な学習に主体的に取り組むため原動力になる。「B：学習活動の設定と実施」の場面において、体験活動後に、感じたことや考えたことなどを話し合っ共有する場面を設定し、対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせたことは、児童が探究的な学習に主体的に取り組むうえで有効な手立てになったと考える。

また、児童ウの下線⑧の振り返りの記述から、話し合いの過程において、児童の発言をXチャートにまとめて整理したことは、児童の新たな気付きを促し、対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせるための一助になったと考える。

これまでの3年間の研究では、児童が自ら「考えるための技法」を選択し、「思考ツール」を決定して思考する力を育むことを求め、附属旭川小学校「技法&ツール」ハンドブックを作成し、このハンドブックを活用しながら、総合的な学習の時間や他教科・領域において、「考えるための技法」や「思考ツール」を取り入れた授業を積極的に行ってきた。

今回活用したXチャートは、複数の視点から考えを述べる手立てとして使うための思考ツールであった(資料9)。これまで、このXチャート使った授業を何度も行っており、児童は、この思考ツールを使って考える力を身に付けていたので、下線⑧のように、「Xチャートを使って情報を交流したことによって、川への『あこがれ』や『可能性』を気付けた。」と感じた児童が多くいたと推察する。

昨年度の2年次研究終了後から、児童が自ら「考えるための技法」を選択し、「思考ツール」を決定して思考する力を育むために、総合的な学習の時間と他教科の教育課程に、活用できる「考えるための技法」と「思考ツール」を明記しているので、今後もその取組を継続していきたい。

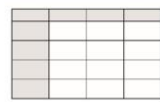
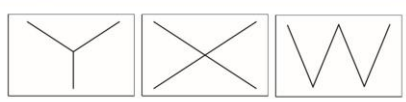
## ③児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせる工夫

下線部⑨、⑩、⑪の発言から、児童が自分たちの予想との「ずれ」を感じたことによって、川について調査したいという課題意識が生まれたことが分かる。

また、課題意識の高まりによって探究意欲が生まれたことが、下線部⑫の本時の振り返りの記述や、単元後に実施したアンケートの項目5の結果から明らかになった。

このことから、「B：学習活動の設定と実施」の場面で、課題意識を醸成するために、児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせる場面を位置付けたことは、児童が探究的な学習に主体的に取り組むうえで有効な手立てになったと考える。

⑤多面的に見る・多角的に見る：「マトリクス」「Y, X, Wチャート」

1・2年	3・4年	5・6年
複数(ふくすう)の視点(してん)からの気付(きづ)きを示(しめ)す。	複数の視点からみて、考えを述(の)べる。	視点を設定して、複数の角度から考えを述べる。
 「マトリクス」	 「Y, X, Wチャート」	

附属旭川小学校「技法&ツール」ハンドブック2019

資料9 「技法&ツール」ハンドブック



アンケートでは、児童は次のように自己評価している（資料12）。

	アンケート項目	そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
6	事前調査に作成したイメージマップと、1次発見過程終了時に作成したイメージマップに変化はありましたか。	31名 (86%)	5名 (14%)	0名 (0%)	0名 (0%)
7	⑥で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を選んだ人に質問します。イメージマップの変化を見て、これまで学習したことの価値を実感したり、自分の変化に対して喜びを感じたりしましたか。	30名 (83%)	4名 (11%)	2名 (6%)	0名 (0%)

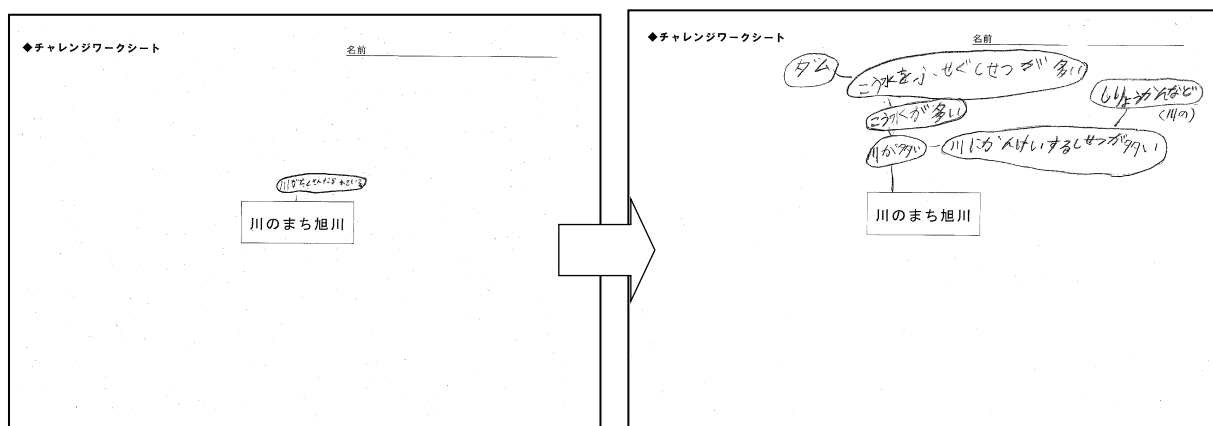
資料12 イメージマップの変容に対する喜びの獲得感の事後調査結果

## (2) 考察

児童オの2つのイメージマップを比較すると、事前調査のときよりも知識が増えていることが分かる。また、それぞれの情報が具体的になり、関連する知識を結びつけていることが読み取れる。下線⑤の振り返りの記述や、単元後に実施したアンケートの項目6、7の結果から、本実践において、概念の形成を自覚する自己評価としてイメージマップを作成することは、児童が自分のよさや可能性に気付く手立てとして有効だったと考える。

また、本単元の評価規準（知識及び技能）を1次では「旭川市は川との関わり（治水、利水、親水、環境、生物、防災、文化、歴史等）が強いまちであることを理解する（事実的知識）」ことと設定している。児童オのイメージマップには、複数の旭川市の川との関わり（治水、親水、環境、生物、防災）が書かれていることから、学習状況は「おおむね満足できる」状況（B）と判断できる。

一方で、児童カのように「事前調査」と「1次：発見過程終了時」のイメージマップの変容が少ない児童も数名いた（資料13）。



資料13 児童カのイメージマップ 左「事前調査」 右「発見過程終了時」

児童カは、単元後に実施したアンケートの項目7で、「どちらかといえばそう思わない」と回答している。

児童カの2つのイメージマップを比較すると、治水や防災に関する情報が少し増えただけである。しかし、これまでの振り返りには、「忠別ダムは洪水を防ぐためにつくられたことが分かった。」（治水、防災の視点に関する記述）、「永山新川管理センターでは、牛朱別川分流樋門を管理していることが分かった。さらには重要な役割を担っていると感じた。」（治水、防災の視点に関する記述）、「石狩川にはたくさんの魚や虫がいた。旭橋の近くに沓座石が置かれていた。旭橋の色は変化している。」（生き物、歴史の視点に関する記述）、「カムイの杜の近くを流れる伊野川周辺には豊かな自然が残されている。そこに生息するオニヤンマが減っていることを知り、とても残念に感じた」（環境の視点に関する記述）、「昔と今の川の形が変わっていることに驚いた。川があることによって水不足にならないことが分かった。」（歴史、利水の視点に関する記述）などがあり、複数の視点の知識を得ていることが分かった。



このことから、児童が自分のよさや可能性に気付くためには、イメージマップだけを活用するのではなく、振り返りの記述を教師が価値付けてフィードバックするなど、複数の手立てを併用することが重要だということが分かった。また、児童の学習状況を評価し指導者の指導改善につなげる資料として活用する際も、イメージマップだけでなく、振り返りの記述も併用する必要があることも明らかになった。

今後も引き続き、児童が自分のよさや可能性に気付くための手立てを継続して研究するとともに、「知識及び技能」を始め、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点の実現状況を把握できる段階を吟味したり、把握するための複数の手立てを設定したりする必要があると考える。また、学習評価の妥当性、信頼性を高めるために、評価規準の作成の仕方についても探っていきたい。

## IV まとめ

本研究では、児童の「よりよく生きようとする力」を育むための効果的な手立てについて明らかにすることを試みた。そのために、発見課題の設定までの過程「1次：発見課程」における「B：学習活動の設定と実施」での、共通体験による課題意識の醸成、対象への「あこがれ」や「可能性」を感じさせる工夫、児童の考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせる工夫、更には、学習活動における概念の形成を自覚する自己評価について『川のまち旭川』調査隊』の実践を基に論を展開した。以下に、成果と課題を示す。

### 1 成果

- 発見課題の設定までの過程「1次：発見課程」の「C：単元のゴールの設定」や「E：発見課題の設定」場面の前に、共通体験を設定したり、対象への「あこがれ」や「可能性」、考えとの「ずれ」や「隔たり」を感じさせる工夫を施したりすることによって、児童の課題意識が醸成され、探究的な学習に主体的に取り組むことができた。
- 概念の形成を自覚する自己評価として、イメージマップの作成を位置付けたことにより、学習活動の中で、児童に自らの理解がどれだけ深まったのかを認識させることができた。また、そのことによって、自分のよさや可能性に気付かせることもできた。
- 「知識及び技能」の観点を見取る手立てとして、児童が作成したイメージマップを活用したことによって、学習状況を評価し、指導改善につなげることができた。

### 2 課題

- 探究的な過程を通して獲得された概念を見取る手立てとしてイメージマップを作成することは有効だったが、イメージマップだけでは、獲得した概念の変化を見取ることはできなかった児童もいた。今後は、イメージマップの他にも概念を見取る手立てについて研究を進める必要がある。
- 学習活動において、「知識及び技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点の実現状況を把握できる段階を吟味したり、複数の手立てを設定したりして、教育課程に位置付ける必要がある。また、評価規準の作成の仕方についての研究を行い、学習評価の妥当性、信頼性を高める必要もある。

## V 参考文献

- 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 文部科学省 平成29年6月
- 初等教育資料No. 966 「特集Ⅰ 新学習指導要領の全面実施に向けて 総合的な学習の時間」 文部科学省 東洋館出版社 平成30年4月
- 初等教育資料No. 969 「特集Ⅰ 総合的な学習の時間における資質・能力の育成に向けた授業づくり」 文部科学省 東洋館出版社 平成30年7月
- よくわかる教育評価【第2版】 田中耕治 編著 ミネルヴァ書房 平成22年11月
- 新しい教育評価入門 西岡加名恵 石井英真 田中耕治 編著 有斐閣 平成27年4月
- カリキュラム・マネジメント入門 田村 学 編著 東洋館出版社 平成29年3月

- 小学校 学習指導要領 ポイント総整理 総合的な学習の時間  
田村 学 編著 東洋館出版社 平成29年 9 月
- 小学校新学習指導要領の展開 総合的な学習編 田村 学 編著 明治図書 平成29年11月
- 深い学び 田村 学 著 東洋館出版社 平成30年 2 月
- 「深い学び」を実現するカリキュラム・マネジメント 田村 学 著 文溪堂 平成31年 3 月
- 授業のビジョン 小川雅裕 著 東洋館出版社 平成31年 6 月

---